

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 平成30年11月10日
(73号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

人間学講座
第77講

「いま目の前のことに
心を込めなさい」

鈴木秀子 先生



■見える世界と見えない世界
私たちが見ている見える世界は、行動の世界、現実の世界です。見える世界では学歴や地位、美しさなど、何一つ平等などありません。しかし人間は見える世界だけを生きているのではなく、精神・心の見えない世界も生きています。

ある立派な経営者の方がおられました。その方が癌になり入院されて、大きな病院の広い特別室に入られました。部屋中蘭の花で埋め尽くされ、たくさんの方が見舞いに来られます。その人が言われるのには、「自分は今まで見える世界で頑張つてやってきた。会社を大きくし、子どもたちにも立派な暮らしができるようにと、自分のエネルギーを皆見える世界に費やしてきた。しかし、いま病气となり、余命三ヶ月と言われたときに、今までずっと「横」に力を注いできたが、そのことには意味がないと思えてきた。心を満たす力は「縦」に繋がる力ではないか。仮に人のエネルギーが十あるとすると、これまで九以上を行いや業績などの見える世界に注いできたが、心を満たすということとはしてこなかった。あんなに辛い思いをして努力してきたのに、心を満たすことをしなかったがために、空しい一生となってしまった」と。そして「生きていくということは、心を満たす訓練をしていくことがどれほど大切か、死を前にしてそれを分かせてもらえたことはよかった」としみじみ話されました。その社長には、見舞いにくる人が義理で来ていることまでが分かってしまうようになり、そこでさらに空しさが募っていった

のですが、ただ一人抱えの運転手さんだけが心から自分を思っていてくれたことに気づけたそうです。その思いに気づけたときから、人との本当の心の交流が生まれ、やがて、初めは義理で見舞いに来ていた人たちまでもがだんだんと様子が変わり、いつか心が通じるようになっていたとのことでした。社長は、心が通じることのありがたさを教えてもらった、自分ひとりでは決して幸せに出来ない。人との繋がりの中で人間のいのちは生かされている、と実感されたのでした。

■人間の尊さ

いのちとはいったいどこから来たのでしょうか。聖書には、神は愛で溢れた方であり、そして人間とは、愛を分かち合うための、お互いに大切な存在として、愛そのものであることが記されています。また、神は「一瞬一瞬一人ひとりを良しと見給う」とあります。この自分では作ることのできないいのちは、神の愛の溢れとして、一瞬一瞬与えられている。人間のいのちとは、即ち神のいのちを一人一人の中に入れて、生かしているということ。だから一人一人のいのちは尊い。人間の尊さは生きている限り尊いのです。この尊いいのちを現実の生活のなかで、その与えられたいのちにふさわしく輝かすために、私たちは天分である仕事を与えられています。そして置かれた場で、仕事を通して、いのちを輝かせ現実を良くしていくことが、生きるということの意味です。一人一人の人間に対しては「あの人は立派だ」等々その業績などを口にしますが、人間の基本的な尊さ、尊厳は皆平等なのです。だから私たちは、お互いを較べ合うのではなく、大切にしようことをして生きていきたいと思えます。

■三つの絆

心を満たすとは何なのか。東日本大震災の折、絆という言葉が叫ばれました。それは命からがら

災害から逃れた人たちが、自分一人では決して生きられない、お互いに絆を深め合う大切さをあの辛さの中で発信されたからです。絆には三つあります。それは①自分自身との絆②他者との絆。③人間を超えるもの、自然や大いなる存在との絆です。

自分自身との絆をいかにして磨くのか。神の愛の溢れとしての存在である自分自身を、不要な心配や不安で自分を下げ、損なっていないでしようか。まず、自分を下げる言葉を言わないこと。自分の尊さを自覚することが一番の基本です。そして一つでいい、どんな小さなことでも良い、当たり前前に感謝しながら、今ここにあることを心こめて行なうこと。それが自分自身との絆を深めてゆくことです。一つ一つのことがやがて時間を経て、集大成となり、徳のある人となっていく。なぜかその人のそばに行くことが知らないうちに自分も穏やかになる：穏やかで和やかで温かい気持ちや調和を伝えてくれる、そんな人が徳のある人ではないでしょうか。他者との絆。一杯のお茶もたくさんの方の手を経て私たちに届きます。生きている限りたくさんの方々の恩恵を受け生かされている、絶対に孤独ということはありえないのです。そして一ミリだけでいいから、他の人が喜ぶことをしていければと思います。人間は人から認められるときに成長します。人の良いところを見つけて認める人間になることを自分から始めましょう。大いなる存在との絆とは、自然との絆です。この自然への敬意を持つ生き方は、日本人は先祖から送られてきています。自然をまとめている、全てを保つてくれている大いなる存在と絆を深め感謝を深めてゆくこと。その中で私たちが人間として生かされていることを意識し、宇宙全体が破壊に向かうようなことにならないよう努めていかねばなりません。

(抄録 中川千都子)

《グループ討議》

□ 講師 鈴木秀子先生

「いま目の前のことに心を込めなさい」

【Aグループ】

- ① 自分をさげる言葉を言わない。
- ② 「ほめる」言葉を使い、それを素直に受ける。
- ③ 就寝前、あたりまえのことに感謝する。
- ④ 人から認めてもらうとき、育っていく。

【Bグループ】

- ① いまこの一瞬にここを込める。
- ② 差別 グループになると始まる。
- ③ 自分の命は自分だけのものか？
自分だけのものでない!!

- ④ 過去のことにくよくよしない。

【Cグループ】

- ① 自分をさげる言葉を使わない。
- ② 見える世界と見えない世界。
- ③ 他の人の良いところを見いだして認める。
- ④ 自分一人では生きていけない。

【Dグループ】

- ① 幸せの発信地。徳のある人を目指す
- ② 見えない世界を大切にしてここを満ちたす。
- ③ 小さな一つのことにここを込める。
- ④ 自分との絆を大切に、自分自身と仲良くする。

【Eグループ】

- ① 寝る前、あたりまえのことに感謝する。
- ② 見えない世計に意識を向けることの大切さ。
- ③ 自分のことを卑下しない。
- ④ 心がモヤモヤしているときは軀を動かす。

《読書会》（Aグループ）

- ・指導 細川三郎顧問
- ・テキスト 福沢諭吉に学ぶ『賢者の知恵』
- ・進行 山路直美世話人

◆ 今日、いま自分が日々の中で、
「実践している」ことを、
各自に発表いただきました。

- * 神社へのお参り、感謝、ゴミ拾い
- * 神棚への礼拝
- * トイレで便器に「ありがとうございます」
- * 就寝前に本を読む（こころのお風呂）
- * 毎日一時間 Walking
- * 笑顔を絶やさずの活動
- * 神仏への祈り。「ありがとうございます」
- * 「コウノトリのゆりかご」活動の、悩み相談
- * 週末のトイレ掃除
- * 読書・日記・街頭清掃
- * 利他の精神で生活を終えたい
- * 絵手紙、ゴミ拾い、『修身教授録』を読む
- * 会社回りの掃除



《読書会》（Bグループ）

- ・指導 近藤宏枝世話人
- ・テキスト 森信三『一語一会』
- ・進行 大西由香塾生

十月四日

人生の智慧を身につけることは、非常にむづかしいことで、そのためには、結局人生の苦労というか、さらに逆境の試練というか、そうした「知の授業料」を納め、軀をしぼって身につける他ありません。

十月六日

事務的な仕事を処理する秘訣としては、結局「即今着手」すなわち「すぐにその場で」ということである、そしてそのためには、今一つ「義務を先にして娯楽を後にせよ」という人生の最も具体的心理が先行せねばなりません。

十月十一日

いやしくもわが身の上に起こる事柄は、そのすべてがこの私にとっては絶対必然であると共に、またこの私にとっては、最善なはずで、それ故われわれは、それに対して一切これを拒まず、一切これを却けず、素直にその一切を受け入れて、そこに隠れている神の意志を読み取らねばならぬわけです。



第7期 人間学塾中之島塾質向上委員会 ～番外読書会～「森信三先生に学ぶ」

一、挨拶 二、概要説明 三、ミニ読書会

森信三先生『一日一語』 「各月13日」の言葉

一月 すべて手持ちのものを最善に生かすことが、人間的叡智の出発といえる。教育ももとより例外ではない。

二月 「家計簿」をつけるということは、妻たり主婦たるものの第一の絶対的義務。

三月 縁なき人の書物を数十ページ読むのが大事か、それとも手紙の返事を書くほうが大事かーこのいずれをとるかによって、人間が分かれるともいえよう。

四月 暗室に入ったように、周囲の様子が見え出すまでは、じっとして動かない。これが新たな環境に移った場合のわたくしの流儀です。

五月 「下学して上達す」 下学とは日常の雑事を尽すの意。それゆえ日常の雑事雑用を軽んじては、真の哲学や宗教の世界には入りえないというほどの意味。

六月 人間もつねに腰骨を立てていると、自分の能力の限界がわかるようになる。随って無理な計画はしなくなる。私が今日まで大たい計画の果遂できたのも、その根本はこの点にある。

七月 なぜ私が石が好きかというと

(一) 第一には何時までたっても倦きがこない。

(二) また石は、盆栽や小鳥などのように一切世話や手入れの必要がない。

(三) その上、ブームになるまでは、石には金銭的な値段がつかなかったので、私のような横着者には最上の趣味でした。

八月 性に関しては、たとえ人から尋ねられても答える義務はない。何となれば、聞く方が非礼であるのみならず、「性」に対する冒瀆だからである。

九月 尊敬する人が無くなった時、その人の進歩は止まる。

十月 尊敬する対象が、年と共にはつきりして来るようであれば、真の大成は期し難い。裏切られた恨みは、これを他人に語るな。

十一月 西 晋一郎 先生 *

現身の 人の形に生れまして もろもろ人に 道示させし
みのちに 触りせざりせば おぞの身の いのち如何にか 生きむとやせし

(一) 人間形成の三大要因

(二) 遺伝的な先天的素質

(三) 教師ないしは先達による啓発

(三) 逆境による人間的試練



《お薦め書籍》

『自分を創る禅の教え』

横田南嶺 著



出版 致知出版社
頒価 一六二〇円(税込み)
ISBN 13: 978-4800911834

「禅」というのは、興味があるけど難しいもの、近寄りがたいもの、と思ってきましたが、この本は、「禅の教えの極意」を分かりやすく、日常の生活の中で「ゆつたりとした時間を感じながらその言葉を味わう」ことにより、「人生の指針」が見えてくるような本になっています。

忙しく毎日を過ごされているサラリーマンや主婦の方にも、指導的立場に立っている方にも、「自分の生き方を少し立ち止まって考える」大切さと、「生きていく喜び」を感じることが出来る本だと思います。

《先哲に学ぶ生き方》

森信三 先生

「ホメる」

接する子どもの長所や美点を発見することの名人になること。

叱ることによりホメることに重点をおき、九つホメて一つ叱るぐらいでもなおホメ方が足りないということを中心に銘記すべきだと思います。

森信三

「運命を創る一〇〇の金言」より

《人間学塾・中之島》

■ 基本カリキュラム

*日時 12月8日(第二土曜)

*場所 大阪大学中之島センター

10F 佐治敬三ホール

*講師 上甲 晃 先生

「生きる基本を問う!!」

1941年大阪市に生まれる。1965年松下電器産業(株)に入社。1988年財団法人松下政経塾に向。理事・塾頭を歴任。1980退社し志ネットワーク社を設立。1997年『青年塾』を創設。現在第22期生を迎え、累計約1800名を超える。主な著書『志のみ持参』『人間として一流をめざす』『志を教える』『志を継ぐ』など著書多数。

◆ ご紹介くださいませ!!

● 「聴講」へ

お知らせの方々を、お誘いください。

聴講費 四、〇〇〇円(小冊子謹呈)

聴講後に入塾いただいた場合、聴講費は塾費より減額いたします。

● 「入塾」へ

中途入塾を大歓迎しています。

年間塾費は、月割り(入塾月)にしています。

※多くのみなさま方からのご紹介を、「塾生の 塾生による 塾生のための塾」「縁のスクランブル交差点」人間学塾・中之島へご紹介お願い致します。

《大悟徹底》

寺田一清先生寄稿録

「そろえる」



「脱いだ履物をそろえる」を「しつけの三カ条」の一つとして強調し力説せられたのは、森信三先生でした。これはあたりまえのことと思われがちですが、宿泊先のスリッパの脱ぎ場をご覧になれば気づきでしょう。「そろえる」ことの大事さを痛感なされたことでしょう。履物だけでなく、挙手の際の「指」をそろえることも強調せられました。また、札入れの中のお札をそろえることの大事さも。すなわちお札をはち合わせにしたりせず、人物写真を逆さまにしないことの基本を説かれました。またイスに腰掛けたときの脚を揃えることも注目せられました。くわえて食事の時、菜飯別食の一つの方法として箸置きに箸をそろえることの大事さを教わりました。

以上おわかりのように――

- (一) 靴をそろえる
- (二) 指をそろえる
- (三) 札をそろえる
- (四) 脚をそろえる
- (五) 箸をそろえる

この基本動作の習得こそ、最基本的原理とすら思うこのごろであります。

何と森先生の教えは日常的であり、具体的であります。これが何よりもありがたいのです。道と名のつく修行道入門の着手点をかくも親切にお教えくださっているのです。

おろかなるわれに手をとり教えたまう

師にも情けのありがたきかな

かくばかり凡事小事の徹底を

師のみ教えのありがたきかな

「一宮ますみ読書会」百会記念報誌集より抄録